

1973.3.16号

の背景

# 気になる 周恩来の対日戦略



中嶋嶺雄

東京外語大助教授

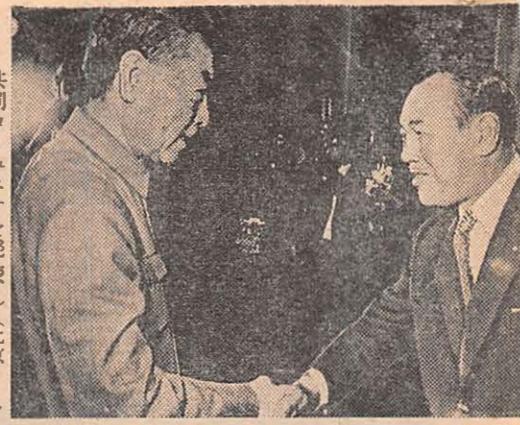
米中共同コミュニケが発表され、ワシントンと北京の両首都に外交特権を持つ連絡事務所を設置するという。これだけで米中も事実上の正常化へと進んだわけだが、この両大国のヤリ口の老獪さ、日中復興でわが国がみせたナイーブな「人の好き」とは対照的だった。どうやら、またしても日本は出し抜かれ、米中の挟撃に遭いそうなのだ。

ベトナム停戦後のアジアをめぐるあわただしい動きのなかで、ハノイと北京を相次いで訪問したキッシンジャー米大統領補佐官が、ワシントンへの帰途、日本に「まる一日だけ」立ち寄り、田中首相ら日本政府首脳と秘密の会談をもったとき、わが国のさる政府高官は、「アメリカもずいぶん、日本に気をつけているなあ」と、胸をなでおろしてつぶやいた、という。

キッシンジャー補佐官が忙しい日程をさらにくりあわせて、佐藤前首相とも会談を求めたこ

ともあって、アメリカも最近の経済問題にからむ日米間の軋線の調整にいよいよ本気になっているのだとの印象を、一般には与えたし、わが国のおおかたの新聞も、今回のキッシンジャー訪日は、日米関係の調整によってポスト・ベトナムのインドシナ復興への日本の協力問題が大きな狙いであった、と伝えている。

だが、このような予想や期待に反して、ホワイトハウスは去る二月二十二日、今回のキッシンジャー訪中による新しい米中



# 米中共同声明

# やっぱりニクソン

共同コミュニケを発表し(北京も翌二十三日発表)、米中双方は「近い将来、相手側の首都に連絡事務所を設立することで意見が一致した」と世界に告げた。しかも共同声明発表後のキッシンジャー氏の記者会見によると、この「連絡事務所」(リエン

## 「台湾」そのまま話つけた米

「アメリカも、ずいぶん日本に気をつかっているなあ」と日本政府の高官に信じこませ、日米協力によるベトナム復興が大きな課題だと日本のマスコミに思

ン・オフィス、連絡処)には、外交特権が与えられ、本国政府との暗号による電信も許されるものになるという。つまり、大使館開設ではないものの、実質的かつ公的な米中外交関係が近く再開されることになったのに等しいのだ。

和条約の「廃棄」による日台間の外交的断絶という大きな代償のうえに国交を正常化したばかりのわが国にとっては、やはり大きな衝撃であろう。つまり、台湾問題には一言もふれずに、あらゆる点で台湾政府との現状を維持したまま、このようなかたちで事実上の米中関係正常化をやりとげようとしているキッシンジャー外交の

「知恵」に、わが国が、いまだだしぬかれたことだけは否定できない。

だが、このような結果には、それなりの由来がある。この由来をつきつめていこうなら、アメリカと日本との対中国接近にかんする「知恵」の落差だとも、それはいえるのではないかと私は思う。「知恵」の落差を生むのは、たんに外交的なマヌーバ

ビリティ(行動能力)の差だけでは決まないのであって、相手の出方や問題点をどこまでリアルに分析し、それにたいしてどのような方法を研究するかという分析力と構想力の差にこそ、それは求められねばならないであろう。ここでひるがえって、一般の日中国交回復にいたるプロセスを考えてみると、わが国の対中

交渉において、そのような分析力と構想力がはたして介在していたであろうか。ただただ、心理的な圧迫感のなかで相手の手のうちをいささかも読みとることなく、「日中日中」と一濁千里につづばっしていっただけではなかったか。

こうして日本の対応は、私もしばしば指摘してきたように(たとえは、拙稿「日中友好の機熟すればこそ」『文芸春秋』一九七二年十月号)、実際には、日本側よりも、より多く中国の側に日中国交を急がねばならない事情があったことなどには、ほとんど目もくれないものであったし、それだけに、そのような事情をカムフラージュしつつ、「彼を知り、おのれを知れば、百戦危うからず」、「兼せ賤げば明るく、偏り信ずれば暗し」の立場をとれる中国側には、きわめて好都合であった。

だが、狡猾で知的なニクソン・キッシンジャー政権は、相手側が右の格言で示したような立場をつねにとることを知りつくしているだけに、決して日本のようにお人好しではない。そもそも、ニクソン・キッシンジャー外交にとつて、その外交のグラン

ド・ストラテジー(権謀術数)が、ニクソン政権発足の当初から、ベトナム戦争の終結と米中関係正常化にあったことは、いままさらいうまでもない。ニクソン大統領は一九六九年一月、その第一期ニクソン政権就任直後の記者会見で示唆していたように、第一期ニクソン政権の当然の外交課題としてベトナム和平、さらに第二期ニクソン政権を予想して一九七三年以降には、中国との国交を含む法的・国家的関係の改善へと進むステップを構想していたのであった。

そうして、このようなグラランド・ストラテジーに基づいて六九年七月、例の「グアム・ドクトリン」(ニクソン・ドクトリン)を提起し、中国にたいしても、一方的な秋波(シグナル)を送ったのであったが、こうした秋波

うちみ・ねんざ・筋肉痛に

ペタン—シッフの

# パテックス®

ペタンと貼るだけの分厚いシッフ薬です。  
バネ・こり・痛み・熱をとり…長時間シットリしています。

●こんな時にもペタン—シッフ  
肩こり、腰痛、神経痛、関節炎、ロイマチス、  
関節炎、気管支炎、耳下腺炎、腫脹

純良医薬 第一製薬

を中国が受けてたつたのは、六九年夏の中ソ戦争の危機(中ソ国境の軍事衝突)によって、迫りくるソ連の脅威を中国が痛切に感じていたからにはかならなかつた。そのような中国の事情を知りつくしていたアメリカは、ニクソン政権自身、ベトナム問題の解決がきわめて困難であった当時の状況のなかで、内外からのニクソン政権への批判に当面していただけに、そのような窮地に立つニクソン政権の大幅なイメージ転換に迫られ、当初のスケジュールを早めて、ニクソン訪中へとステップを進め、そうした努力の末に昨年二月の米中北京会談が実現したのであつた。

だが、この場合にも、アメリカ側は、中国の「家庭の事情」と中国側の真意をつかむための努力をおこなつた。いわば、危大な情報を背景とする「中国研究」と対中政策立案のための徹底したブレイン・ストリーミングがおこなわれたのである。

たとえば、今回もキッシンジャー一行のスタッフのなかに、リチャード・ソロモンという名前があがっている。彼は、前回もキッシンジャーに伴つて北京会談に臨んでいるが、私の知人でもある彼は、本来、ミシ

ガン大学助教として、今日のアメリカの中国学界のなかでもきわめて有能な若手学者であつた。

## 日本の台湾撤退後に米が進出

こうしてアメリカは、対中政策を練つた。そして、とくに台湾問題の処理について研究し、いかにして、台湾とのコミットメント(公約)を維持しながら、中国との関係を実際に改善するかを研究した。その結果、編み出されたのが、「一つの中国、だが、すぐにはなく(One China but not now)」と云う新

しい中国政策であり、ニクソン大統領はこの新しい中国政策をたずさえて訪中したのであつた。

「われわれは節制をもってこの平和を長つづきさせよう」とテレビで演説するニクソン大統領



「われわれは節制をもってこの平和を長つづきさせよう」とテレビで演説するニクソン大統領

「われわれは節制をもってこの平和を長つづきさせよう」とテレビで演説するニクソン大統領

り、「毛沢東の革命と中国の政治文化」(一九七一年)という著作をものしたばかりである。

だから、昨年一月の時点では、アメリカの側にむしろ余裕があり、「林彪異変」という大きな代価を支払って米中接近という大きな外交上の転換にこぎつけた中国の側にこそ、切迫感があつたのである。このことは、北京空港でのニクソンと周恩来との出合いの表情にもあらわれていた(もっとも、当時、たまたまJITVの中継解説に当たっていた私は、そのような印象を語つたが、NHKの方はまったく逆の見方で解説したそうである)。

いづれにせよ、このような文脈の延長線上で問題をながめてみると、今回の米中新コミニケはきわめてよく理解できるし、ニクソン・キッシンジャー外交としては、米華防衛条約にも手をふれず、台湾の地位にこれ以上の変更を加えることなしに、中国と事実上の国交を開く「新しい知恵」をひきつづき研究していたのであり、それが今回のような結果をもたらしたのであつた。

こうしてみると、日中国交のために平和条約である日台条約を「廃棄」し、周四条件を中国の「弱さ」のあらわれでなく、その「強さ」のあらわれだと誤認して、次々に台湾との関係を断ち切つたわが国政府およびわが国財界の対応とは、そこにき

\*住まいづくりによく役立つ!

新しい  
**住まい**  
の設計 4月号  
390円

カー/クラピア  
住宅実例特選

建築費380万~690万円を最も  
上手に配分して建てた中小住宅12例

特別企画 専門家が教える緊急作戦!! 木材、関連  
建材の高騰はこうすれば乗り切れる

★本誌一か年予約購読者に2大特典(詳細は本誌をごらんください)  
サンデー新聞社出版局

わめて大きな違いがあるといわねばならない。

ここでこのことを確認する意味で、アメリカと台湾との最近の関係について少しふれておこう。この点でも、きわめて現実主義的な認識と対応に徹しているアメリカは、米中関係の進展とともに台湾との実務的な関係を薄めるどころか、中国側の「本音」を読みとって、むしろ台湾との関係を経済的には強化しているのである。

去る一月八日付「ニューズ・ウィーク」誌も伝えているように、最近のアメリカ・ビッグ・ビジネスは、日本の大手企業が台湾から相次いで「撤収」したのを、これ幸いとばかり、台湾への進出をつづけている。フォードやGMがすでに大きな進出をとげ、たとえば、フォードはこれまでトヨタの提携会社であ

った「六和」の新しいオーナー！ になったことなどはよく知られているが、こうしたメーカーのみならず、金融界も、たとえば、チェース・マンハッタン銀行が去る十二月、新たに台北に進出したことに示されるように、台湾進出にきわめて貪欲であり、やがては台湾を拠点に東南アジアにおいて、日本経済のシェアに対抗しようとしていることはいうまでもない。さらに、去る二月二十二日、米中新コミュニケーション発表当日のワシントン発AFP電によると、アメリカは、台湾で近くF5E超音速戦闘機撃墜機約百機を台湾政府と共同生産することに合意したという。

このような現実を見ていると、日本外交のお人好しぶり、日本人の単細胞的な国際関係の対応ぶりが、いままさならに、想い起されねばならなくなるで

あろうが、今回の共同コミュニケーションを見るにつけ、再検討されねばならないのは、まず第一に、過般の日中国交交渉のあり方についてであり、この点は、では日本ももう少し別の手だてがあったのではないか、という反省につながるのかもしれない。

高麗人蔘エキスが  
そのまま召しあがれます

● 韓国からの輸入医薬品

高麗複方人蔘精ヘジンジントンは韓国の江華島、錦山地域で、6年の歳月をかけて産出した良質の高麗人蔘を主成分にしています。

● 精力・体力減退・疲労回復に……

● 高麗人蔘エキス5000mgを1瓶に配合  
1瓶に人蔘エキス5000ミリグラムという濃度を配合し、さらにビタミンB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>・B<sub>6</sub>を加えた医薬品です。液状ですから開封して1日1瓶をお飲みください。冷やせば飲みやすくなります。



MADE IN KOREA

1瓶 500円  
6瓶 3,000円  
36瓶 18,000円

商品名

高麗複方人蔘精

人蔘精  
〈ジンジントン〉

全国有名アパート、薬局で発売中。品切れのさいは本社薬品事業部へどうぞ。

輸入発売元

オリジナル株式会社

東京都江東区毛利2-1-2 TEL03(631)8183-6

道徳主義的でありすぎるのであって、わが国における中国認識の浅薄さと、その中国関係の脆弱さこそ問題があるように思われる。なぜなら、この点を今後とも十分に考えてゆかないと、すべては「あとのまつり」になるしかなく、「ちよっと眉を寄せれば、たちまち計略がうかぶ」(三國志演義) 中国側の対応に

抗しきれないであろうからである。最近の中国の対外外交への傾斜ぶりについては、最近のわが国の新聞にも伝えられたように、さすがのJ・P・サルトル氏も「大国外交になりはてた……」と驚いているようである。

当分、日ソ関係をさらに開かれた視野から改善することによって、米中の紐帯にたいする一定のバランスをとることも必要であろうが、これらの問題を含めて、もっと外交に「知恵」を働かさねばならないであろう。「日本列島改造」という内政上の大風呂敷をいたずらにひろげてしまった田中内閣は、十分な構想力をもたずに日中国交を急いだことのリバーカッション(はねかえり)を外交面で今後受けとめ、それに耐えてゆかねばならないが、いずれにせよ、内外ともに、そのツケはかなり大きなものとなって返ってくるように思われてならない。